



# PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

## 人間の命が

### 始まるとき

もし子宮に窓があったらなら中絶はなかっただろう、と言われてきました。こんなにも明瞭に生き生きと元気に発達している赤ちゃんの姿は、様々な危害を加えようとするとどんな冷血漢をも抑制させるでしょう。

超音波ソノグラフィーの出現によって詩編百三十九番で述べられているような「秘密の事」ではもうありません。しかしそれでも私達は、恐ろしくも素晴らしく作られているのです。概念うんぬんの前に、今私達は新しい人間が形成される、驚くべき美しい課程を観察する事ができます。いくつものとても良いビデオテープや本が、あなたを命の最初の日々の旅へと連れていってく

れます。産まれる前の命の素晴らしさを経験すれば、胎児の人間性に対しての疑問を持つ事はなくなるでしょう。

たくさんの方が、特に妊娠した女性が、いかに早く子供の形成が始まるかを初めて知って驚きます。「組織のただひとつの塊」どころか、その子供は人間と見分けられ、とても小さはいけれど心臓の鼓動と脳波もあります。七週間目では、すべての重要な器官が出来上がります。八週間で赤ちゃんは、痛みを感じる刺激を避けようと、手の中に置かれた物を握る事もできます。

赤ちゃんが吸収装置で身体を引き裂かれる時、何も感じていないと誰もいえません。ナサンソン医師によるビデオ「沈黙の叫び」の中で、中絶賛成者は中絶された子供が吸収された入れ物を見せて、その形のない物はどう見ても

子供ではないと言って、彼等の「組織のただひとつの塊」論を増強しました。でもそれは明らかに間違っています。

十週間目で赤ちゃんの指紋がみられます。赤ちゃんは指をしゃぶり始めます。面白い事に、産まれる前に指をしゃぶっていた赤ちゃんは必ず産まれた後もそうする事を、医者が発見しています。十二週間目で赤ちゃんは羊水を吸い始め、静かに泣く動作も出来ます。この段階で家族に似ている顔の作りが見受けられます。

この辺りで形成はほぼ完成します。この先、赤ちゃんはただ大きくなり身体を動かします。また、体重をすみやかに増やし強くなります。子供が子宮の外でも生きられるかどうかは、利用できる医療器具に全くなかっているのです。もし人工的な胎盤が発明されて完成したら、赤

ちゃんが早産によって命の危険にさらされる事はなくなるでしょう。今の段階では、医者は子供の肺が空気を呼吸できる程完成するまで出産を延ばさなければなりません。

CL. 3月 94年

# 親と10代の性

## Part 1

「十代の若者に結婚前の自制を悟らせるのはなぜ？」

自分の子どもが十代になつたとき、彼らにどんな夢を抱きますか？子どもが大きくなるにつれ、どんなことを望みますか？幸福？自信？人を愛すること？決断力を養うこと？ほかにも大学を出ること、いい仕事につくこと、幸せな結婚をすることなどいろいろと希望はあるでしょうが、これらはすべて成熟した個人という基礎ができて初めて実現可能なことです。つまり社会的、感情的、理知的、個人的、倫理的、そして肉体的なすべての面で成熟することです。

それでは十代の子どもに対して不安の要素は何でしょうか？成熟の過程で妨げになるようなものがあるのでしょうか。多くの親は薬やアルコールの危険を心配します。またいざずれ経験するであろう性行為による影響も心配します。それは当然のことです。今日では十代の若者の妊娠と性病(STD)は記録的な勢いで増加しています。しかもエイズの登場で、若者は命を奪う性病の格好の犠牲となっているのです。

そのようにならないように若者を守るため、多くの教育者や親たちが、セックスや生殖について、またバース・コントロールや中絶について正しい知識を与えようと性教育を主張してきました。これは十代の若者は自制することができず、さらにその必要もないというアプローチ法であり、この問題は理想だ

けを追い求めるのではなく現実的に対処していかなければいけないということを教えています。しかし中にはこの方法が現実味に欠けるのではないかと疑問視する研究者もいます。彼らはこの伝統的な性教育が十代の妊娠や性病を減らすための役割を果たしているとは言いがたいというのです。

ある調査によると十代の若者は家族計画などを含む終始一貫した決定を下すにはまだ未熟だということも示しています。いくら避妊具に関する知識があろうとも、彼らはそれを実際使用するに当たっては未熟であります。ですからバース・コントロールによる性活動を「教える」ことはノンセンスであるわけです。ある十代の若者向けのプログラムは、知識の豊富な13才の子どもは、避妊具を使うに当たってはそれに関する知識のな

い13才と同じぐらい下手である。」と報告しています。社会は金やエネルギーや活力を無駄にしてきたわけなのです。

十代の若者に性活動を直させることはできませんでしょうか。私たちは社会的模範が社会が成り立つために機能していることを知っています。そうでなければ交通もメチャクチャになります。百万人もの人が車を運転する中で、運転する人達は自発的に交通ルールを守っており、そのため事故もほとんど起きずにいるわけです。これと同じような模範や価値観が結婚前の性活動にもあてはまるのです。

この問題には別の新しい解決策も登場しました。「自制教育」というものです。この「自制」という言葉は何かを差し控えるという意味がありますが、もつと積極的に自分の性活動を正しく判断し管理

するという能力を反映することも考えられるわけです。

自制教育は人から愛され、感情的にも成熟し、単に感情に走ることをない人間の完成を目指していません。性活動や生殖力を尊重します。また人々が人間として愛情や生命を他人に与えるという威厳を尊重し守ります。自ら自制を選んだ人に自分と他人を思いやる気持が養われます。健全なライフスタイルの発展がこのアプローチ法の基礎となるのです。このような基本的な方法が今必要とされています。

### 「自制教育の役割」

結婚前の自制について教育することは健康の問題でもあり、人間の成長目標でもあります。次のような要素が促進されます。

(1) 私生児の出産、性病、性行為によるエイズなどマイナスの結末を回避することの認識

(2) 性関係のない異性と健全な対人関係

(3) 将来の目標を追求することの満足感

(4) 人間の性行為によらない愛情表現

これらの要素は、次の10年間の社会における労働力の必要性を考える上で重要となります。なかには、結婚前の自制教育は宗教めいたところがあり公には教えるべきでないという考え方もあります。しかし彼らは全社会に有益で、基本的な人間の価値を見落としているに過ぎないのです。一人一人が結婚前の性行為を自制することと社会のためになることがあるのです。そしてそ

れはその人自身の健康や目標、そして対人関係を向上させることにもなるのです。

「私だって十代の時に性行為をもったけど、別に何の苦悩もなかったわ。」とか、それも大人になるってことの一部だよ。自分のしたことには責任を持つからね。」と言って結婚前の自制教育を拒否する大人もいます。

あるいは自分がきちんと実行できなかったことを子供に押し付けるのは気が引けるといふ人もいます。それはそうです。人間だれでも過ちは犯します。でもだからといって各世代が毎回同じ過ちを繰り返すというのも納得が行きません。昔よりもずっと危険が多いのです。

### 「自制教育の前提」

ここでこの本を理解す

るうえで役に立つと思われ、いくつかの前提をあげておきましょう。

(1) 性欲にはセックスそのものや人間の生殖といったもの以上の意味があります。それはその人の資質の一部であり、他人とかわる際にも影響するものであります。

(2) 人間の行動は理性を伴うものであり、その点で動物とは異なります。

(3) 性活動はコントロールすることができます。

(4) 家族は十代の子どもの価値観や行動に影響を与えます。

(5) 両親や家族は子どもにとって主たる性教育者です。

から、結婚するまで控えることが望ましいと考えられます。

(7) 結婚前の自制はだれにでもできることであり、健全なものであります。

(8) 生殖や避妊に関する教育が十代の性活動や妊娠を防いだり減らしたりするものでないことをいくつもの調査が証明しています。

(9) 自制に対する評価が結婚前の自制をさらに確かなものにします。

(10) 養子縁組は私生児を出産した時や中絶しなければならぬ時に良い選択肢になることもあります。

(11) 育てたいように子は育つ。

対する期待は大体かなうということですが、

「十代の若者にとって避妊は解答ではない」

十代の若者の性活動を抑制するために避妊教育が圧倒的に多く取り入れられている訳ですが、統計や調査によると、学校の保健授業や避妊具に関する知識が若者の性活動を減らしたという結果は出ていません。

十代の未婚の若者たちの実際の避妊具の効果的使用率は、この問題に対して新たな疑問を投げかけます。バース・コントロールを使用した場合でも、妊娠するのはたいいていの場合、既婚の十代の若者よりも未婚者の方が多いのです。例えば百人の未婚少女が相手にコンドームを使ってもらいセックスをすれば、それから1年以内

(6) セックスは肉体的、感情的そして社会的な理由

つまり、自分の子どもに

に13人から22人が予期せぬ妊娠をしてしまうので

す。これはどういうことかという十代の若者は成人に比べて避妊具の使い方が良くないということである。

この問題に関しては社会科学の面からも指摘されている。十代の若者は知的・感性的にまだ成長しきっていない。だから大人としての判断を下す際の方法や手段を備えていなければ、彼らにとって終始一貫した家族計画を効果的に取り入れることは難しい。

大人は、避妊具についての知識を得たりそれを使用するよりもっと家族計画に効果的なものがあることを知っている。つまりそれは意志決定能力であったり、結婚という安定した関係であったりするのだ。結婚は夫婦間に性的関係のみでなく、子供を作

るかどうかを話し合うことも可能にするからだ。

今では、結婚した相手以外とセックスをする場合はコンドームを使って自分を「守る」必要があると言われる。だが、コンドームの有効性については、いわゆる、より安全なセックス」といったガイドラインで調べ直した方がいい。受精可能期間は女性の周期のうち4分の1だが、エイズウイルスは百分の危険率である。コンドームでエイズから免れようというのは、ロシアン・ルーレットをするようなものである。

研究者たちは今まさにエイズの実際の影響に関する調査を始めたばかりである。エイズは完全に発病するのに10年はかかる病気である。十代の若者のエイズ患者は今後も増え続けることだろう。この病気を避ける最良の方法は、結婚前に性行為をしない

ことである。

繰り返しになるが、結婚前の性行為には妊娠とエイズ以外の副作用がつきまとう。年間何百万もの人が性病に悩まされるのである。現代の若者は大変な危険にさらされており、また生涯合併症に侵されることもある。(続く)

THOL-1991

## 生命はすばらしい

### ある医者の見解

私は医大で5年間学び、大学院に3年間在籍した。その間ただ1度だけ講師の一人が赤ん坊を守るために話をしたのを聞いた事がある。実際その話がありにも影響が強かった。講師が私達に問いかけたのがどの病棟のどの病室だったか、そして私達が立っていたベットの位置まで鮮明に思い出す事が出来る。話題となったダウン症の子どもが非常に可愛らしい顔立ちをしていた事さえ覚えてる。ダウン症は染色体異常による病気で、知能発達の遅れ、心機能障害、身体的未発達等があらゆる弊害のうちでも目立つ特徴である。その時の学生の意見は「胎児がダウン症と分かれ

ば即中絶すべきだ」というものから「分かりません」というものまで様々であった。私自身は後者であった。討論の最後に、その講師が次の質問を投げかけた。「君達はこの知能発達障害の子どもに、その命と引換にどんなすばらしいものをあげられるかね？」その時はじめて、中絶の権利という概念が私の頭から消え去り、医学の道を選択する決意を私に固めさせる事になった。

妊娠中の子どもと母親に向けられる我々人類の反応は著しく変化している。昔なら妊娠すれば皆大喜びしたものだ。だが近頃は不幸な事だと悲しむ事も多くなった。女性が既に二人以上の子どもがいるときはなおさらで

ある。古代から子どもは祝福すべき神様からの授かりものとされてきた。なのに最近、胎児への感情が愛情ではなく敵意へと急激に変わってきたのはどう

いう理由であろう。その原因を考えると、人工過密問題がしばしば頭をよぎる。学校不足、常に満員状態の病院、耕地不足、その他

色々な弊害を巻き起こす人口の増加。この問題が本当に深刻なものなら、唯一の解決策は出生率を減らす事であろうが、その結果どうなるかは誰一人として語らない。過去、出生制限を数年にわたって実施した国々では、近年子どもを増やそうと必死になっているが、長年子どもをいらないという考えが国民の心に深く根付いていて、人々を説得できないでいる。人的資源の乏しい国では経済を維持するのが極めて困難で移民の増大が大変な脅威となっている

という状況を語らずして時は流れていく。

日本やイギリス本土の数倍もの土地を持ちながら、ケニヤはおよそ二千四百万人の人口しかない。わず

かばかりの土地をめぐって戦いを続けるユダヤ人はネジブの砂漠をエデンの園に変えてみせたように人的資源があれば、常に何かしら活路があるものだ。人口密度が出生制限をしている中国の十倍以上に国民全体が裕福な生活をしているヨーロッパの国々がある事に驚嘆させられる。人口は多いほうが国内市場が強大になり、労働力が豊富になり、ともすると利用されずにほって置かれる事になりかねない資源を活用する余裕すら生む。ならば、人口の多さだけを問題にするのは明らかに間違っているのではないか。真の解決策とは、富をより良く取り扱い、より公平に分配する

事である。しかし、この解決策はほとんど語られていない。

人口過密問題のお化けにとりつかれると、人間の生活に関わる他のどんな重要な問題もかすみがちになる。この最も軽蔑すべき例が生活の質に関する問題である。生活の質を決めるのは人と動機である。

例えば、金持ちの人の生活の質が良く、貧乏人は明らかに生活の質が悪いと定義する人がいるならば、生活の質の基準となるのはお金という事になる。また、別の人にとって、生活の質は健康と、丈夫さの程度が基準となっている。心身障害者、年寄りや、病人などは生活の質が劣っているという事になり、社会から締め出すべきだという結論に至る。手始めに、将来自分で自分の面倒を見れないようになると思われる胎児を消し去ろうという事になる。

一方、胎児よりも母親の方が人間の生活を主張する権利があると考える人々がいる。母親の生活、安楽で裕福な毎日が何より重要であり、まだ姿が見えないのをいい事に胎児に何の権利も与えない。

真実は、誰も皆生きる権利があるという事である。生命は天からの贈り物、すばらしいもの、美しいものである。しかし、この美しさは他人の目にはほとんど写らず、価値を認められない。裕福な人々が精神的に貧しく、退屈しきって過ごしている一方で、命をつなぐだけのぎりぎりの必需品でその日暮らしの生活をしながらも生きる喜びにあふれた日々を送っている人々もいる。頭脳はアルバート・アインシュタイン程すばらしいのに、墮落した有害な人間もいれば、ダウン症だけれども思いやりにあふれ、愛すべき人間もいる。

子どもを何人持とうが自分がそう選択したなら誰に謝る事もない。他人には関係ない事なのだから。私は別に子どもに対して無責任でよいとか、結婚生活でむやみに生殖活動をせよとか言っているわけではない。しかしどんな命でも授かれば、一人の人間として尊ばれるべきなのだ。誰もが生きる権利がある。この権利は人々の生命を守るべき立場にある州政府や医師によって与えられる権利ではない。それぞれが今一度子どもの顔を見つめて、恐怖ではなく喜びを感じて欲しい。その小さな弱々しい体には人類の未来という大きな希望が脈々と流れているのだから。

マーガレット・

オゴラ医師

## 社会へ

### 開かれた窓

私達が社会に何かを訴えたいと願う時、手段の一つに報道の力を借りる事があります。ラジオ、テレビ、そして新聞：良きにつけ、あしきにつけ、その影響力の強さには驚かされます。

今回高知県下に行き渡っている高知新聞が私達の《赤ちゃん：最初の十カ月の旅》を記事として取り上げて下さいました。カイロでの国際人口会議以来人口問題が話題になる時、さまざまな新聞がどちらかというところ女性の権利を謳った記事が多かったように感じます。そんな中で、私達の目にはまだ見えないおなかの赤ちゃんの本を紹介して下さったおかげで事務所には来客や電話が後を絶たず、二日間

は日頃の仕事が全くストップするほどになり、その対応にうれしい悲鳴を上げていました。

フランスの小説家サンテグジュペリーはその代表的な著作『星の王子様』で、大切なものは目には見えないんだよ」と言っています。私たちはすでにこの世に大人として生を受けているので、自分達の権利主張を声を大にして叫ぶ事が出来ませんが、目には見えず、叫び声をあげることの出来ないおなかの赤ちゃんは一番小さい、一番弱い存在です。

高知新聞がそんな赤ちゃんのために記事を書いてくれた事は、どんな状況のもとであろうと、どんな障害を持っていようと全ての命を大切に私達の運動に社会への一つの窓を開いてくれた事になるのでしょうか。今まで気づかなかった人達がこの高知新聞の記事を読んで

おなかの赤ちゃんの命を考える機会となり、プロ・ライフの活動に何らかの形で関わって下さるようになれば、それ以上の喜びはありません。社会へ開かれた一つの窓に向かって私達は叫びます。「受精の瞬間からその命を大切にしましょう！」と。

日本プロ・ライフ・

ムーブメント